

★ 特集：タイルの剥落を防ぐ補修改修工法 ★

インタビュー

# 建築ストックを残すため、 機能のバリューアップも必要

工学院大学 建築学部建築学科 田村 雅紀 教授に聞く

耐久性・耐候性に優れ、意匠性の優れるタイル外壁は人気の外壁仕上げである一方、浮きや剥落といった不具合は依然として大きな課題となっている。

タイルの美観を保ちながら剥落を防ぎ、健全な状態を維持していくのか。社会的な建築ストックを活かしSDGsに応える重要性と将来の展望について本稿では工学院大学建築学部の田村雅紀教授に話を伺った。

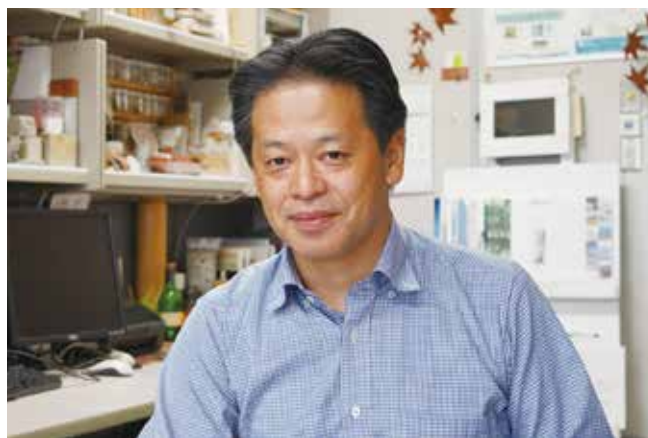
(編集部)

## まずは最適な工法・材料を

——持続可能型社会に向けた建築ストックの活用に意義について教えて下さい

建築物の平均的な寿命が50年から60年と考えると、ちょうど1970年くらいの建物が更新時期に入ってきています。1985年にJASS19セラミックタイル張り工事が制定され、1987年にサステナブルディベロップメントという考え方が示されました。そう考えると、タイルの剥離・剥落を防ぐという話とSDGsの考え方というものが時代としてはリンクしています。つまり、建築ストックの活用と持続可能型社会の実現というゴールは共通認識されていてよいといえます。また、建築ストックとSDGsの考え方がリンクしてきた50年間で、有機系材料による補修改修工法が出てきたのが1990年代前半であることを考えると、既に25年が経過しており、無機系材料の歴史に対して有機系材料がちょうど半分ほどの時間を経過してきたといえると思います。

現在、材料的にも技術的にも様々な補修改修工法があるなかで、建築物の現状をしっかりと把握するために調査診断を行い、そのタイル外壁を剥離・剥落させないための最適な工法で守っていく。そして、状態の悪いものに関しては、12条点



▲「SDGsや都市における建築が果たす責任を全うさせるためにも透明保護塗膜による補修改修工法は有効です」と語る田村教授

検を適用しながら、建物をいたわり、躯体を保護して長寿命を実現させていく。外壁材という服を着させて、温熱作用や紫外線などの外的要因から守り、止水性を確保するために目地をしっかりと施工することで躯体が痛むことを防ぐことも実現できます。また、有機系材料による優れたタイルの変形追従性は、地震や風といった外力に対して冗長性を示し、歪みに対する剥離・剥落防止のリスクを下げられる非常に有効な性質を持たせられるのではないかと思います。

——既存のタイル張り建築の多くがモルタル張りですね

タイル外壁の良いところは耐久性が高くて材自身の経年変化が少ないことが挙げられます。その一方で、躯体精度が上がったために、躯体表面の目荒らしを適切にしなければ剥離につながってしまいます。下地モルタルの塗り厚、有機系材料と無機系材料との相性、適切な材料量、止水性の確保などの下地の処理という段階に止まらず、タイル張り躯体の精度を確保していかなければならない。また、躯体保護性を有するタイル外壁への寿命の配慮もなされつつあり、タイル外壁への機能性を高める手立てを講じるようになってきています。